

序

近年、写真や画像検査はわれわれにとってますます一般的なものになってきました。私が初期研修医になったばかりの頃は皮疹の写真を撮るにも医局から大きな一眼レフをもってきて撮影し、そしてそれを現像するという作業が必要でした。それに比べて今、写真は非常に身近なツールとしてわれわれの日常に溶け込んでいます。臨床写真はすでに臨床のすぐ延長線上にあるものです。

臨床写真はわれわれに多くのものを与えてくれます。カルテにグラム染色の所見を載せれば、主治医だけでなく抗菌薬適正使用推進チームや薬剤師と情報を共有できます。珍しい疾患の皮疹の写真は、同僚と共有することで自分たちの経験を倍増させることができます（情報の取扱には注意しましょう）。さらには、近年は学術ジャーナルでも臨床写真の投稿コーナーが注目を集めており、英文誌への投稿を狙う若い先生方も増えています。このように臨床写真はさまざまな用途に活用することができ、無限の可能性を秘めているのです！

この臨床写真の可能性を追求しようと、われわれは2018年に日本臨床写真学会を設立しました。同年9月には第一回学術集会を開催し成功裏に終えることができました。今後も定期的な開催を予定していますので、本特集で臨床写真に興味をもたれた方は、ぜひ日本臨床写真学会のフェイスブックなどをチェックしてみてください。

本特集は「コモンな疾患のコモンな所見」を集めました。日常診療で遭遇する頻度の高い疾患ばかりですが、まだ遭遇したことがない若い先生方にとっては典型的な所見を知っておくことではじめての診断に備えることができるでしょう。指導医の先生方には、研修医への指導に使うアトラス的な使用もできることと思います。

また本特集は「コモンな疾患のコモンな所見」という医学生から初期研修医、後期研修医の先生方を主な対象とした特集ですが、医学書院から刊行されます「総合診療」2019年11月号では、それに加えて指導医からベテランの先生方も対象にした「レアな疾患のコモンな所見」をテーマに特集しています。ご興味のある方はぜひそちらもご覧いただけましたら幸いです。

これらの特集が皆さまの日常診療に役立つことを願いつつ、これからも皆さまと臨床写真をますます盛り上げていければと思います。

2019年9月

国立国際医療研究センター 国際感染症センター
忽那賢志